

# 高尾山 歴史の散歩道

50

明治大学博物館 外山 徹

## 鎌倉河岸奉納の狛犬



湯島出開帳の世話人頭取の名が刻まれている

今回は宝暦の宝篋印塔について先に述べたが、本社・飯縄権現堂へ登る石段の途中に安置されている、飯縄権現の石像についても触れておこう。江戸後期の地誌『八王子名勝志』には、飛飯繩二ノ鳥居より石段十階登りて左側にある石像なり」として記載がある。当時の鳥居は石段の登り口にあったので、石像の位置としてはこの記載に該当するが、果たして石像自体がその当時からのものであるか確証はない。

### 飛び飯繩

この「飛び飯繩」と呼ばれる伝承について同書は、「ある年同郡日野宿よりして此ところにとび来りたまう故に名づく」と記す。江戸期の日野宿には飯繩社が祀られており、現在もJR日野駅の近くに健在である。この飯繩社は鎌倉期に遡る由緒や、甲斐武田家遺臣との関わりも伝えられるが、同社に残る奉納額に、室

町期に高尾山へ飯縄権現が飛び移ったという説が書かれているとのことである。何分古い時代についての伝承ゆえ確証はないが、元々高尾山は薬師の山であるから、あながち無視できない謂われがある。なお、日野宿には多くの護摩檀家があつた。神社と言えは八幡・稲荷をはじめ数多の中に埋もれる感はあるが、実は西多摩から神奈川県域にかけて、地図を丹念に見てゆくと、飯繩社の分布がわかる。江戸期に末寺であつた普門寺（相模原市緑区）の飯繩社が有名だが、この外にも各地に飯繩社が分布する。これらの小社のいくつが高尾山と関わりを持つかは定かではないが、飛び飯繩の伝承は、高尾山から飯繩権現が勧請されたか、あるいは在地の祭祀集団から奉納があつたか、というような想像をたくましくさせる。権現の神号は明治維新の神仏分離で否定されたため、神像の

撤去もかなりあつたろう。江戸期以前においては、現在以上に飯繩社が分布した可能性もある。続けて本社への石段を踏みしめて登ってゆくと、中ほどでいったん猫の額ほどの平地に出る。石段の両脇に狛犬が身構え、左右の斜面には金銅製の三十六童子が配置されている。いかにもこれより上の本社を守護する様相で、神域の高みに達しつつあることを感じさせる。不動明王の眷属である三十六童子像の建立は、明治四〇年（一九〇七）三月に本社の修繕と同時に勧進が始まっている。「寄付金募集の旨趣書」には、本社前面の斜面に巖石を配置して三十六童子像を安置し、「本尊の威光を倍增」する旨が謳われており、計画では二年後の竣工を目指していた。

### 石造獅子・狛犬

狛犬は三十六童子よりもぐつと古く、寛政三年

(一七九二)の銘がある。この参道の両脇を固める彫像は空想上の動物である。元来、外から入る邪気を祓う魔除けのために置かれたものだが、強いものといふことから百獣の王ライオンがモチーフだったと言われる。そのため、元来は「獅子」と呼ぶのが妥当だが、日本人にとってライオンは未知の動物であり、そのため犬がモデルになったことと、在来種ではない外来の動物ということから「高麗」が冠せられたという説がある。古代には宮殿の守護聖獣として置かれたが、その頃には右側の口を結んで角を生やしたのが狛犬、左側に口を開いたのが獅子というのが正式らしい。その後、一対で狛犬と呼んだり、左右が逆転する事例も出てきたようだ。ここでは右側が獅子ということになる。また、口の形は仁王像と同じ「阿」「吽」を示している。

狛犬の銘文には江戸鎌

倉河岸（千代田区内神田二丁目）の豊島屋甚兵衛と同じ甚助、伊勢屋四郎右衛門、大竹忠七、矢野伊四郎、矢野松三郎の名が見える。寛政三年は、江戸湯島で高尾山の出開帳が執行された年で、その世話人頭取を務めたのがこれら的人物であつたが、彼らが開帳したの記念に奉納したのもこの見立てとなる。開帳とは堂内の戸帳を開くという意味で、普段は秘仏とされてい本尊を、期間を限って公開する行事である。より多くの信徒に結縁の機会を開くため、繁華な都市に出張しておこなうのが出開帳である。参詣に訪れる人出をあてに店や芝居小屋が並ぶと、今度はそれを目当てとする人々が押し掛け、賑やかなイベントとなった。各地の社寺が江戸で出開帳を実施しており、賽銭や奉納物を得る格好の機会であつたが、江戸幕府は人々の浪費を抑制するため、出

浪費を抑制するため、出

開帳の実施には概ね三三年の周期、五〇〜六〇日の日数という制限を設け、修復費の勧進などしかるべき理由を必要とする許諾制を布いていた。開帳場は府内の寺院境内を借地し、中でも両国の回向院は出開帳のメッカであり、全体の四分の一弱がそこで実施された。指摘されている。また、浅草や深川など庶民の多く集まる下町の寺町で実施される傾向があつた。江戸での出開帳は一七世紀の後半から始まり、元禄期（一六八八〜一七〇四）に最初のピークを迎えるが、高尾山の出開帳が最初に実施されたのはそれからしばらく後のこととなる。元文三年（一七三八、本所（墨田区）大徳院大仏勧化所において四月一日から二ヶ月と二〇日の日延ともない最初の出開帳が実施された。この時世話人を務めたのも鎌倉河岸の講中であつた。

中であつた。

### 湯島出開帳の執行

次の機会となつたのが先述の寛政三年で、三三ヶ年よりはしばらく間が空く五三年ぶりのことになる。出開帳の執行にはしかるべく受入れの組織を必要としたようであるが、代替わりした講中のメンバーがその引き受け手となつた。

薬王院文書に残る幕府への願い書の控えによると、前年八月二〇日の大風雨による諸堂大破の修築費用を捻出するという理由で三月一五日から五月一四日まで飯繩大権現と本地不動明王及び山内の靈宝を公開することになってい。薬王院では寛政二年に「当山絵図面下書」という境内諸堂宇の見取図を作成しており、これは境内修築・再整備を策定する関連資料であり、湯島での出開帳執行はそのデモンストレーションとして計画されたようだ。この寛政年間には、日本堂や唐銅五重塔が建立されることになる。

湯島での出開帳が繁華に執行された様子は、「開帳寄進物記」という史料から偲ぶことができる。鎌倉河岸からは四神（白虎・朱雀・青竜・玄武）のことが、形態は不明）大幟、三河町一丁目からは赤地金襴菊模様の戸帳・打敷・錫瓶子、大手呉服商の伊豆蔵から赤地金襴鶴亀模様の戸帳、同じく三井越後屋から毛氈二〇枚、草加宿の大川清左衛門と稗田村新井孫助らから大幟、八王子宿から護摩壇と真鍮仏具・神前修法器。それ以外にも「高尾山」の額、幕、香炉、燭台、石燈籠などが寄進されてきたことがわかる。おこたわり、史料の引用については、読みやすく原文に手を加え、適宜読み仮名を付しています。《参考文献》乾 賢一「地域社会における飯繩信仰の展開」『八王子市史研究』創刊号、二〇一一